

歴史のさとと 多古を歩く

太古の昔から人々が生活を営み、
時には戦乱の世の舞台となり、
永く城下町として栄えた多古の地。
数々の歴史を物語る史跡を巡り、
古の空気を感じてみませんか。

其ノ巻 通史を知る

約一万年前、多古の低地部分はまた海の底でした。やがて海底の隆起によって陸地が増え、低地をぬうように流れる栗山川の流域には豊かな農耕文化が発展しました。栗山川からは約五五〇〇年前のものと思われる一本木をくり抜いて作った丸木舟が出土しており、魚類の採取や交通の手段として川を利用しながら人々が生活をしてきたことが窺えます。遺跡も多く、しゃくし塚古墳やおけ塚古墳など巨大な古墳が残っていることから、四世紀頃にはかなりの権力をもった豪族が支配していたと推測されます。

古来より繁華な土地として栄えてきた多古地方ですが、中世以降は政權を巡って栄枯盛衰の歴史が繰り返されます。平安時代末期、千田荘と呼ばれていた多古地方を支配していた平家一族の千田親政が、同じ平家に属しながら源頼朝に力添えをした千葉常胤に激怒して千葉城を攻撃するものの、無念にも敗れてしまいます。この事件により、千田荘は千葉氏の支配下に置かれることになりました。その後「関東の名家」と呼ばれるほど賢く優れた政を行っていた千葉宗家ですが、室町時代中期に一族の骨肉の争いが勃発。千葉胤直・胤宣父子が胤直の叔父にあたる馬加康胤に攻められ、激しい戦いの末、一族郎党ともに命を落としてしまいます。千葉宗家は断絶し、その後、北条氏の傘下にあった他の千葉氏一族も豊臣秀吉に攻められて落城、敗退しました。

戦国時代末期、多古地方を治めていたのは、徳川家康の関東入部に伴って天正十八年（一五九〇）下総国多古に一万石の領地を与えられた保科正光です。信濃高遠城主・保科正直の長男で、後に高遠藩の初代藩主になるまでの約十年間、下総多古藩主を務めました。また信仰心が篤いことで知られた正光は、二代将軍・徳川秀忠の信頼を得て、秀忠の庶子の幸松の養育係も

任されました。幸松は正光の養子となって保科正之名を改め、さらに会津藩初代藩主となって三代将軍・家光、四代将軍・家綱を陰で支えた名君として知られています。

正光が高遠藩に移封となった後、廃藩となっていた多古藩は慶長十三年（一六〇八）に土方雄久によって立藩されるものの元和八年（一六二二）に再び廃藩。寛永十二年（一六三五）に駿府城代であった旗本・松平勝政の子、勝義が領主として入部したことにより松平氏の采地となり、正徳三年（一七一三）に多古藩領主五代目の松平勝似が一万二千石の大名となって多古藩が立藩されると、ようやく政權が安定しました。第六代藩主・松平勝権は藩校を設置して藩士の文武奨励を図るなどの業績も残しています。こうして明治維新を経て廃藩置県で廃藩になるまでの二百三十年余り、松平氏がこの地を治めました。その後、多古県、新治県を経て、明治八年（一八七五）千葉県に編入されました。

明治維新以後は全国で二番目に耕地整理事業を推進させたことで、農業は一層盛んになりました。「多古米」で知られる米作りの礎となり、広大な畑地も開拓されてさつまいもや大和芋などの栽培も始まりました。このような先人たちの思いと痕跡は、多くの史跡や文化財として残され、私たちに古き時代を伝えてくれます。

早朝の栗山川

悠久の歴史を思わせるような栗山川の黎明。太古から今日まで、この多古の地では数々の歴史ドラマが繰り広げられてきました。



縄文時代前期末の丸木舟

〔町指定有形文化財(考古資料)〕
栗山川流域遺跡群から出土した約5500年前の縄文時代前期末に作られた最古級の舟です。一本木をくり抜いて作られていて、全長が7m45cmもあります。多古町コミュニティプラザに展示されています。



人面付土器

弥生時代の人面付き土器。新城遺跡から出土したものです。



志摩城跡から出土した弥生土器

志摩城跡からは東日本最大規模の再葬墓群が検出。再葬の際に骨を入れるために使われた壺形土器が多数出土しました。



堀江正章 油彩《耕地整理図》

（千葉県立美術館所蔵）
多古町では明治34年（1901）、耕地整理事業に着手しました。翌35年に最初の工事が完成しましたが、これは全国で二番目という早さでした。事業成功の褒賞として農商務大臣から金一封（500円）が授与され、これを原資に町立農学校（現千葉県立多古高等学校）が設立されたという歴史があります。《耕地整理図》は明治35年頃に描かれたもので、米どころ多古町が誇る美田の様子がよくわかります。複製画が多古町コミュニティプラザに展示されています。



昭和8年(1933)11月写生 多古町鳥瞰図

（成田山仏教図書館所蔵）
松井天山が当時の旧多古町を描いたもの。多古町役場近くにある田町ポケットパーク内の看板「多古 まちなか歴史散策」で見ることができます。

【多古地区】



多古藩二万二千石の中心地として 栄えた歴史を今に伝える



龍蛇頭(りょうじゃとう)
多古の初代領主である松平勝義の父・勝政が天正14年(1586)に徳川家康から拝領したもの。本物の龍の頭で雨を降らせる神通力があるといわれ、今から200年以上も昔、大干ばつの多古地方に大雨を降らせて稲を生き返らせたという伝説があります。葵の御紋の布に包まれて保存されています。



多古藩陣屋跡(MAP▶P31-E2)
多古第一小学校の敷地は、かつてはその全域が多古藩の陣屋でした。現在、校庭の裏にわずかに残っている石垣の一部に当時の面影を見ることができます。



乃木希典揮毫忠魂碑(MAP▶P31-E2)
多古第一小学校校庭の片隅には、日露戦争で戦死した兵士のために乃木大将が揮毫した忠魂碑が建っています。

多古地区は江戸時代、多古藩・松平氏一萬二千石の城下町として栄えましたが、それ以前から、宿場町としての賑わいを見せていた場所でもあります。本町・仲町・新町の三町の形態を見ると、道路が直角に曲がって、枅形を成しています。これは、宿への入り口で宿場内を見通せないようにしたものと思われれます。そんな多古地区の中心部から歩いていきましょう。

多古藩陣屋跡である多古第一小学校の校門脇には石垣が残り、当時の面影を偲ぶことができます。石垣を見学したら、陣屋跡南側の高台にある多古町のシンボル、妙印山妙光寺に足を運んでみましょう。鎌倉時代に日蓮聖人の高弟・日朝によって創建された日蓮宗の名刹で、日蓮聖人自らが髭を



木造伝妙見菩薩倚像(MAP▶P31-E2)
(もくぞうでんみょうけんぼさついぞう)



鐘楼からの眺望



祖師堂

妙印山妙光寺(MAP▶P31-E2)
弘安年中(1278~1287)に日蓮聖人の高弟・日朝が創建したと伝えられ、現在の堂は享保14年(1729)の建立とされています。寺宝である「木造伝妙見菩薩倚像」は、中世に多古地方を支配した千葉一族の守護神として崇拝されていたもので、高さ49.4cmのヒノキの寄木造で、甲冑を身につけ玉眼を入れた迫力ある妙見像です。県の有形文化財に指定されています。同じく寺宝の多古城主・牛尾胤仲の刻印のある青銅製の鰐口[町指定有形文化財]は、天正5年(1577)娘の病氣快癒祈願のために寄進されたものです。

町を中心部から離れて南に進むと、田園地帯の中にぽっかり浮かんでいるかのような島地区があります。楨の生垣が張り巡らされた狭い路地が続く、まるで迷路のような集落です。そんな島地区にあるのが「島の正覚寺」と呼ばれる成等山正覚寺。他宗の者から施しを受けず、信者は他宗の僧侶に施しをしないという日蓮宗不受不施派の教えを、地域の人は篤く信仰してきました。江戸時代には弾圧を受けたこともあり、役人の取り締まりから逃れるための隠し部屋なども家々に設けられていました。また古くは千葉宗家滅亡の地ともなった志摩城もありましたが、当時の痕跡は何も残されていません。



木内家住宅(主屋・旧蔵・旧店舗)(MAP▶P31-E2)
重厚な石造りの建物は、道路に面した旧店舗、その奥に旧蔵、主屋で構成されています。いずれも昭和4年(1929)の建築です。[国登録有形文化財]



旧多古郵便局(MAP▶P31-E2)
多古町は郵便事業においても先進地で、明治5年(1872)5月に日本郵便の父・前島密の要請で千葉県第1号の郵便局[多古郵便取扱所]が開設されました。現在残る建物は、昭和17年(1942)に建て替えられたものです。



若山牧水の歌碑(MAP▶P31-E2)
明治・大正・昭和の歌壇で人々から敬愛された歌人・若山牧水は大正14年(1925)、夫人とともに篤屋(現市原邸)に逗留しました。このときに詠んだ歌が刻まれた歌碑が、市原邸の玄関先に建立されています。



大宮大神(MAP▶P31-E2)
旧多古村の鎮守です。城下町らしく、奉納物には藩士の名前が刻まれたものが多くあります。



八坂神社(MAP▶P31-E2)
旧多古宿の本町、新町、仲町の鎮守です。毎年夏には江戸時代から続く「祇園祭」が行われ、神事の「多古のしいかご舞」は県の無形民俗文化財に指定されています。



諏訪神社(MAP▶P30-B3)
旧多古宿の本町、新町、仲町の鎮守です。千田荘の名を残す旧千田村の鎮守です。上総・下総の国界に位置することから「境の宮」ともいわれています。



民俗資料館(MAP▶P31-E1)
千葉県立多古高等学校内にある民俗資料館には約180点の農具や生活用具が展示されています。昭和41年、一括して県の民俗資料に指定されました。米どころ多古の農業の歴史を知ることができます。



親社大神(MAP▶P31-F1)
多古城主・牛尾胤仲の霊を祀った社です。社前の鰐口と銭額は後年、城山から出土した古銭で造られたといわれています。



隠し階段



山門



地元の歌人・田辺はるの歌碑

成等山正覚寺(MAP▶P30-B3)
成等山正覚寺は日蓮宗不受不施派の寺院です。他宗派からのお布施を受けとらないため、本堂の前に賽銭箱は置かれていません。かつて島地区の家にあった隠し階段が、本堂内に保管されています。



本堂内部



本堂



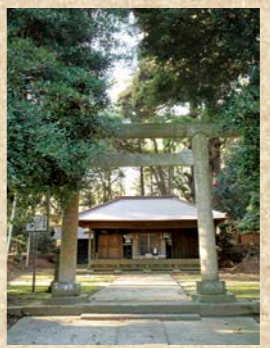
島地区(MAP▶P30-B3)
両側に背の高い楨の垣根が張り巡らされ、迷子になりそうなる島地区。かつて禁教とされた不受不施派を信仰していたこの地区の人々は、役人の取り締まりから逃れるため、入り組んだ道を造ったのではないかとされています。

十五歳で歿した千葉胤直
千葉宗家第十六代の千葉胤直とその子、千葉胤宣が多古の地で命を落とした模様は「鎌倉大草子」および「千葉伝考記」などに記されています。それらによれば、まず胤宣が立てこもった多古城が馬加康胤によって激しく攻め立てられ、ついに八月十二日、胤宣は城外の武佐(居射か)にあった阿弥陀堂にて自刃、十五歳という若さでした。そのわずか二日後、十四日の夜に父・胤直が立てこもった志摩城が馬加方の原胤房に攻め立てられて落城。胤直らは城を抜け出し、舟で東禅寺に至り、翌十五日もはやこれまでと自刃。千葉宗家の悲劇が幕を閉じたのです。



志摩城跡(MAP▶P30-B3)
千葉宗家滅亡の歴史的舞台ともなった志摩城は現在の島地区東端にありました。

江戸時代には幕府の軍馬を育成する放牧地もあつた久賀地区。さらに時代を遡れば、諸国行脚の際に弘法大師も訪れました。井戸山区民館の敷地内にある大師堂には弘法大師の石芋伝説が残り、「石芋大師」



熊野神社 (MAP▶P30-B2)
石段を上り切ると厚重な鳥居があり、さらにその奥に見事な造作を見せる総ケヤキ造りの本殿があります。

とも呼ばれています。法力により冬でも枯れないといわれる青々とした池中の芋を見たら、地元が生んだ偉人、儒学者の並木栗水が開いた螟蛉塾を訪ねましょう。顕彰碑が建ち、多くの優れた門弟を薫育した功績を偲ぶことができます。次に室町時代に断絶した千葉宗家一族が眠る土橋山東禪寺を参拝。続いて、旧高津原村の鎮守である熊野神社へ。熊野神社は八咫鳥で知られる熊野三山の祭神を勧請した神社で、全国にあります。老木が生い茂る境内は、八咫鳥伝説にふさわしいたたずまいを見せます。

さらに「木食上人の入定塚」があることで知られる稲荷山成就院へ。「安産・子育て」の誓願を立て、生きたまま仏になる即身仏になった木食上人。入定の地には塚が築かれ宝塔が建立されています。本堂には木食上人の坐像が安置され、今も安産を祈願して訪れる人が絶えません。最後は私設の米本図書館へ。明治末期に造られた県内で六番目に古い図書館で、並木栗水の蔵書などが所蔵されています。併設の「短歌図書館」には貴重な資料も多く、短歌研究者からも注目されています。

伊能忠敬とともに 全国を歩いた男・平山郡蔵
全国を歩いて測量し、「大日本沿海輿地全図」(伊能図)を作成、初めて国土の正確な姿を明らかにした偉人・伊能忠敬。その忠敬とともに全国測量に当たった重要な内弟子の一人が、南中地区の生まれで忠敬より三十四歳年下の平山郡蔵です。もともと忠敬は平山家と親戚にあたり、忠敬が佐原(現香取市)の伊能家に養子に入る際に親代わりとなって世話をしたのが郡蔵の祖父・平山藤右衛門季忠でした。こうした縁もあって郡蔵は幼年から伊能家に寄宿し、忠敬に算数を学びました。その後も郡蔵は忠敬を慕って江戸に出て数理・測量などを学びました。さらに製図技術も習得した郡蔵は、忠敬の全国測量に加わり、伊能図の完成に大きく寄与することになったのです。

大師堂 (MAP▶P30-B2)
行脚の折に立ち寄った弘法大師が農婦に里芋を無心したところ、石のように固くて食べられないと断られてしまいます。すると里芋は本当に固くなり、作物も取れなくなってしまいました。村人たちが大師堂を建てて弘法大師を祀ったところ、石のように固い芋から芋が出て畑の作物もよく取れるようになったという石芋伝説が残っています。



石芋大師の井戸



並木栗水の螟蛉塾跡 (MAP▶P30-B2)
並木栗水(1829~1914)は文政12年、久賀地区の御所台に生まれました。21歳のときに江戸に出て、儒学の大橋訥庵の思誠塾に入門。7年間勉強をして郷里に戻り、螟蛉塾を開きました。栗水は明治元年(1868)、新政府により新設大学(東京大学の前身)の教官として招へいされましたが、これを丁重に辞退し、螟蛉塾門下の教育に全力を傾けました。螟蛉塾には全国から多くの門人が集まりました。地元多古では、帝国学士院恩賜賞の文学博士林泰輔(旧常磐村)や、衆議院及び貴族院議員として功績を残した菅澤重雄(旧久賀村)など多くの先達がここに学びました。螟蛉塾跡にある顕彰碑の題字は徳富蘇峰筆、碑文は菅澤重雄の書によるもので、昭和10年(1935)に建立されました。

土橋山東禪寺 (MAP▶P30-B2)

千葉氏の所領であった千田荘の中心がこのあたり。無念のうちに命を落とした千葉胤直・胤直・胤直の墓や、並木栗水の墓が本堂西側の高台にあります。



千葉胤直の墓 [町指定史跡]



木食上人坐像



木食上人の入定塚

稲荷山成就院と木食上人の入定塚 (MAP▶P30-B1)

真言宗智恵山派の寺で、木食上人の入定塚 [町指定史跡] があります。後弁上人(神崎町出身)は木食(五穀を食べず木の実、草のみを食べる修行)の後、元文2年(1737)、70歳のときに即身仏となる決意をして入定しました。入定塚の後ろに生い茂るナギの木は「ナンジャモンジャの木」と呼ばれ、その樹皮は安産の護符ともいわれています。



私立米本図書館 (MAP▶P30-B1)
明治42年(1909)に俳人・米本信吾が創設した私設の図書館です。多古町出身の儒学者・並木栗水の蔵書を2千冊所蔵しているほか、後に併設された「短歌図書館」には印旛郡出身の歌人・吉植庄亮の著作や大正から現代に至る歌集・歌誌等が保存されています。保存のための図書館なので貸し出しはしていませんが、貴重な文献を見学することができます。開館日は火曜～金曜の9:30~16:00です。



北条塚古墳 [県指定史跡] (MAP▶P30-C1)
松崎神社の裏にあり、栗山川流域の台地に点在する古墳の中では代表的な古墳です。東西方向に軸をもつ前方後円墳で全長70m、古墳時代後期(6世紀)の築造と考えられています。

松崎神社 (MAP▶P30-C1)

宝龜3年(772)に創建され、坂東稲荷宮と称されていました。社殿前には「空海の逆さ公孫樹」と呼ばれる大きな公孫樹の木 [町指定天然記念物] がそびえ、神社のシンボルとなっています。また平安時代に征夷大將軍・坂上田村麻呂が奉納したといわれる木鼓 [町指定有形民俗文化財] も社宝として残されています。



空海の逆さ公孫樹



社殿



木鼓

町の東側に位置する常磐地区では、まず松崎神社を訪ねましょう。大きな鳥居をくぐると、社殿前にそびえる公孫樹の大きさが目を引きまします。これには空海(弘法大師)が参詣した折、道中携えてきた公孫樹の杖を上下逆さまのまま地中に挿したところ、数日後には芽を出しみるみるうちに大木になったという伝説があります。松崎神社では、毎年三月の第二日曜日に「初午祭り」が催されています。また、六十年に一度巡ってくる丙午の年には「神幸祭」が行われます。参拝を済ませたら社殿の裏手に廻ってみましょう。小高い丘が続いていますが、これは全長七十メートルもある前方後円墳の北



本堂

勝栄山能満寺 (MAP▶P30-C2)

日蓮宗の寺院で、釈迦牟尼仏を本尊としています。安房賀茂村の日蓮寺と同一寺で、賀茂村に日蓮寺を開いた勝栄院日蓮が後年隠居所として、天文5年(1536)に松崎の地に建てたと伝えられています。石段上には天保9年(1838)に地元の棟梁・及川半兵衛によって建立された鐘楼門 [町指定有形文化財] があります。



鐘楼門

条塚古墳です。周囲からは円筒埴輪や形象埴輪と思われる破片も採取されており、力のある豪族が葬られていたと考えられます。松崎神社から南に足を延ばせば、石段の上に鐘楼門がそびえる勝栄山能満寺があります。高さ八・四メートルの鐘楼門は入母屋造り、銅板瓦葺の四脚門で、このように山門と鐘楼が一つになった形は町内でも数少なく、貴重なものです。最後に少し離れますが「しゃくし塚古墳」に代表される柏熊古墳群を訪ねましょう。妙法山正岳寺周辺の山林の中に前方後円墳二基、円墳十一基が点在しています。足下が荒れているので訪れる際は気をつけましょう。



しゃくし塚古墳(柏熊8号墳) [県指定史跡] (MAP▶P30-C1)
柏熊地区にある前方後円墳で全長82mにも及び、多古町に点在する前方後円墳の中でも最大級のもので、4世紀後半、この地方を治めた豪族の墓と思われる。

大和朝廷による 東国支配の拠点

北条塚古墳、しゃくし塚古墳のどちらも「前方後円墳」という畿内地方の古墳と同じ形態となっています。このことから、大和朝廷によって任命された下海上国造に直属する位置にあった実力者の墓と考えられます。下海上国造は、下総の海上・香取・匝瑳の三郡と常陸(茨城県)の鹿島郡南部を包括する地域を統轄していたもので、大和朝廷による東国支配の拠点としてここ多古地方が重要視されていたことが推測されます。

其ノ式 史跡を巡る

【中地区】



全国の学僧が修行を積んだ 「中村檀林」日本寺など日蓮宗の古刹が点在

まず訪れたいのが、正東山日本寺です。日蓮聖人の最大の理解者であった富木日常上人を開基とする日蓮宗の本山寺院で、その後日本中から学僧が集まる中村檀林が開かれ関東三大檀林の一つとして栄えました。本堂には、「交互の御影」が安置されています。これは、日蓮聖人と富木上人が、お互いに相手の像を刻み、終世お互いの像に相対し敬慕しあったと伝えられているものです。春と夏の二回、特別拝観を行っています。

すが、希望すればそれ以外でも拝観できるそうです。近くにある正峰山妙興寺は通称「峯の妙興寺」と呼ばれる多古藩主・松平家の菩提寺です。立派な本堂、山門、鐘楼などが建ち並び名刹で、日蓮聖人直筆の大曼荼羅や立正安国論草稿など多数の古文書を所蔵しています。貞治三年（一三六四）日朝上人の開基とされている竹林山妙光寺は板碑（石造卒塔婆

婆）が多いことで有名で十余基を数えます。法性山浄妙寺は、天平宝字年間（七五七～七六五年）鑑真的創建と伝えられる多古町最古の寺で「北場の浄妙寺」と呼ばれています。寺を守護するように建つ仁王門と一対の金剛力士像（仁王尊）が印象的です。最後に国登録有形文化財にも指定されている澁谷嘉助旧宅正門にも足を運びましょう。澁谷嘉助は日本で初めてダイナマイトを輸入するなど実業家として大きな足跡を

残し、晩年は教育や慈善事業にも尽力した地元が誇る偉人。その旧宅には一際目立つレンガ造の長屋門が残されています。多古には日蓮宗の名刹が多く所在しています。日蓮の教えは、関東から北陸地方の武士階級に支持されていました。その一人が葛飾郡八幡荘（現市川市北部）の領主であり、千葉頼胤の有力な被官でもあった富木常忍です。常忍は幕府から迫害を受けていた日蓮を保護するとともに、日蓮から直接教えを受けました。日蓮の没後、常忍は出家し法華寺を建立、富木日常と名を改め住職になりました。この法華寺が後に中山法華経寺になったのです。後年富木日常上人は多古の中村に隠居し草庵を結びます。これが日本寺の起りとなります。因みに、中山法華経寺が「正中山」と号するのを受けて、日本寺は「正東山」を山号としています。



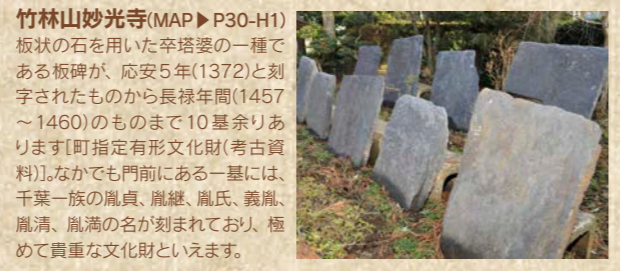
正東山日本寺 (MAP▶P30-G2) 慶長4年(1599)～明治8年(1875)までの間、学僧の学びの場である「中村檀林」がありました。270年余に亘り、延べ10万人もの僧侶たちが集って行ったといわれています。切妻造りの山門(町指定有形文化財)は桃山時代から江戸時代初期に造られたもの。本阿弥光悦の書といわれている「正東山」の扁額は日本三額の一つで、緻密な木組みをもつ2階建ての鐘楼とともに、町の有形文化財に指定されています。本堂には交互の御影のひとり富木日常上人坐像をはじめ、水戸光圀使用の枕屏風や多古藩主・松平家の息女が召していた刺繍が見事な打掛、中村檀林時代の「物読み次第」などたくさんの寺宝が残っています。参道沿いや歴代墓地の周りには、全部で8000株もの紫陽花が植えられ、「あじさい寺」としても知られていますが、現在、さらにこれを充実させた「あじさい庭園」の整備が進んでいます。



法性山浄妙寺 (MAP▶P30-H1) 多古町最古の寺で、釈迦仏を本尊とする日蓮宗の寺院です。天正5年(1577)の多古城主・牛尾胤仲の制札があり、天正19年(1591)には徳川家康から寺領12石の寄進を受け、後の歴代将軍から朱印状を賜りました。



正峰山妙興寺 (MAP▶P30-G2) 日辨上人により正安2年(1300)に創建されました。威風堂々とした構えの山門は明和2年(1765)三世日精の代に建てられ、多古藩主の定紋が付かれています。鐘楼とともに町の有形文化財に指定されています。境内には、「さつ女の墓」もあります。これは、お家騒動の歌舞伎の代表作として知られる「加賀見山田錦絵(かがみやまこきょうのにしきえ)」の主人公・鏡山お初モデルとされる「さつ」の墓です。



竹林山妙光寺 (MAP▶P30-H1) 板状の石を用いた卒塔婆の一種である板碑が、応安5年(1372)と刻字されたものから長禄年間(1457～1460)のものまで10基余りあります[町指定有形文化財(考古資料)]。なかでも門前にある一基には、千葉一族の胤貞、胤継、胤氏、義胤、胤清、胤満の名が刻まれており、極めて貴重な文化財といえます。

澁谷嘉助旧宅正門 (MAP▶P30-H1) 実業家として財をなした澁谷嘉助翁(1849～1930)の屋敷には、正面左右を倉とする長屋門風の正門が建っています。明治43年(1910)頃に建築された民家では珍しいレンガ造りの門です。[国登録有形文化財]

其ノ参 史話を読む

日本武道の開祖・飯篠長威斎家直

日本武術の源流である「天真正伝香取神道流」。この武術を興したのが室町時代中期に香取郡飯笹村(現多古町)に生まれた武将・飯篠長威斎家直(一三八七～一四八八)です。その内容は多彩で剣術、居合術、槍術、薙刀術、手裏剣術、棒術など武芸十八般におよぶ総合武術です。

すべての技に一撃必殺の技術の習得を求め死と隣り合わせの武術ですが、一方で兵法は平法なり」と、戦うことを厳しく戒めています。

年、戦争による資材供出のため廃線となりました。供出された鉄道資材は、当時日本軍が支配していたインドネシアのセレベス島(現スラウェシ島)に移設される計画でしたが、運搬していた船が撃沈されて資材が海中に没したという説と、実際にセレベス島に鉄道が敷設されたとの説があり、さらには、当時の戦局から考えて海上輸送されることもなく、おそらく大砲・弾丸などの原料になったのだから、との説もあり、謎に包まれています。

年にも大千ばつに見舞われ、農民の生活は困窮を極めました。そこで昭和十八年、数十キロメートルも離れた利根川から下総台地を越えて水を引くという前代未聞の大事業に着手します。戦争で一時中断したものの、二十年以上もの年月をかけて昭和四十年に全長七十八キロメートルの両総用水が完成し、一帯は豊かな穀倉地帯へと変貌を遂げました。超大型プロジェクトとして知られる愛知用水事業(昭和三十二年着工)は、この両総用水事業を参考に着手されたものです。多古町には水を平等に分配するための円筒分水工があり、水田に水を引く時期には豊富な水が三方に分水している様子を見学することができます。



流祖・飯篠長威斎家直 戦国時代さながらの 実践に重きをおき、

た、宮本武蔵も神道の道場を訪ねたと伝えられています。門流からは、新陰流の開祖上泉伊勢守信綱や鹿島の塚原土佐守とその子ト伝など、

日本農業土木史上に燦然と輝く両総用水 長い間、水田の水不足に悩まされてきた九十九里平野は昭和八・九年、さらに十五

